

On the Unesco Workshop in Thailand

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24874

報 告

タイにおけるユネスコのワークショップ

太 田 雅 夫

この報告は、タイで催されたユネスコの教育工学関係ワークショップに、筆者がコンサルタントとして参加した経験についての報告である。昭和53年7月31日から9月6日までのワークショップ前後を含めてわずか40日足らずという短期間ではあったが、タイ東北地域に滞在し、貴重な経験をうることができたことは、望外の喜びであった。

ここにその一端を記し、心よく一切の世話と案内をして下さったユネスコ・アジア地域事務所の渡辺良氏をはじめ、様々な体験を共にし、援助をおしめなかったタムロン氏、ディアンコフ氏、その他の方々、準備段階での指導・助言をいただいた文部省学術国際局、国立大学教育工学センター協議会、国立教育研究所の方々に深く感謝する次第である。

警備の厳しい成田空港を後にしたのは、昨年の7月末であった。見送りも東京のシター・ターミナルまでという異常な状況ではあったが、10年程前にタイを訪れたことが気持を落ち着かせていた。ワークショップは、バンコクの北東約700 kmのウボルラジタニ (Ubolrajthani) で開催されるということであったが、当時ラオスやカンボジアとの国境付近のトラブルがしばしば報じられていたし、第一そのような地名は地図に載っていなかった。タイの事情に詳しい幾人かの人に尋ねてみたが、だれも知らないという返事であった。よほど小さな国境の町と思われる、いささか不安であった。

今回のワークショップは、タイ政府がユネスコのアジア地域事務所 (Regional Office for Education in Asia) の協力をえて行う教育工

学に関するワークショップであり、私はそのコンサルタントとして参加することになった。ユネスコからは、開発のためのアジア地域教育革新センター (ACEID) の専門家が加わるということであった。ワークショップのねらいは、農村に適切なる工学 (appropriate technology) を普及するため、その学習パッケージ (learning package) を開発し、今後タイで行われる訓練計画で活用しうる企画者技術の計画・管理に関する模範的ユニット (prototype units) を準備することであった。

機は無着陸でバンコク空港に着いた。ACEIDの渡辺良氏に迎えられ、ウボルラジタニとは地図に記載されているウボンラジタニのことでありと知らされ、出発前からの最大の気がかりが氷解した。空港からホテルまでの景色は、以前とあまり変らなかった。しかし熱帯樹の濃い緑と、そこここに広がる蓮沼の風景が、次第に3、4階建の商店街に移行していく姿を眺めていると、この都市の発展の息吹を感じることができた。とにかく車が多い。国際機関のアジア地域事務所が集中しているだけあって、ブルー・ナンバー・プレート的大型車も多いが、日本車もかなりの割合である。トラックは大きく会社名を表示して走っているのも日本の会社の展示場といった感じであった。トクトクと呼ばれるエンジン付三輪車や人力の三輪車サムローが自動車の間を縫って走る。

ユネスコからの通知によると、7月31日から8月5日まではバンコクに滞在してワークショップの準備をし、6日から30日まではウボルラジタニに赴いて、ワークショップに参加し、31

日から9月6日までは再びバンコクに帰って成果をまとめることとされていた。

バンコクのホテル「R E X」は、スクムヴィット通りにありユネスコへは歩いて10分の距離であった。この便利さのため、ユネスコを訪れる者がしばしば利用するとのことであった。雨季のため曇り空の毎日が続いたが、水たまりを避けながら活気のある道を歩いて通った。下駄ばきアパートを思わせる商店街には、理容店、機械部品店、中華料理店、花屋、洋服店等が並んでいた。二階の床からは数米おきにパイプが突き出ていて、ポタポタ生活排水が落ちるので注意して歩かねばならなかった。海拔1、2米ということで、下水の排水が悪く、臭いがする。それはココナツの油を食する国に共通の特殊な臭いであった。ユネスコは大樹に包まれ、種々の花が咲きにおっていた。ロイ・シン(Raja Roy Singh)所長が花好きとあって、めずらしいラン科の植物の鉢も並べられていた。ACEIDは2階にあり、私はその一角に机を用意してもらった。そこで既に刊行されたレポートや、学習パッケージ、モジュールに関する文献を検討した。昼食や夕食は、主に渡辺氏と一緒に、種々の店を案内してもらった。時々日本料理を交えながら、次第にタイ料理に慣れるよう配慮していただいたので、食事に関しては、何も問題はなかった。靴底大のビフテキが美味で、安いと子供に手紙を出したのを覚えているが、牛肉など300円で1kgは買える。スーパーへ入ると、日本製品も多く、生鮮食品以外はほとんど並べられていた。マンゴスチン、バナナ、パパイヤ、パインナップル、カスタード・アプルなどの果物も安く、味も良かった。ステレオ録音のカセットテープも330円程度でわが国での1割程度であるのには驚いた。

渡辺氏の住むアパートを数回訪れる機会があった。前庭のプールでは白人の若い女性が泳ぎ、各室にメイドが付いて炊事、洗濯をしてくれるという快適な生活であった。他日別のユネスコ職員2人のアパートを訪れたが、いずれ劣らぬ

生活を送っていた。

1週間程経った8月6日、ウボルへ向った。ターボプロップ機はコンケン、ウドンを経由して目的地まで約3時間半で飛んだ。コンケンなどを迂回するから、タイ東北地域を循環する形となっていた。果しなく広がる湿地帯や乾燥地帯を見下していると、わが国の3分の1程度の人々が、約1.3倍の国土に散在するという恵まれた状況を実感として知ることができた。このタイ航空の国内線は隔日に飛ぶというが、ほぼ満席であった。渡辺氏とACEIDのカリキュラム専門家のタムロン氏(Thamrong Buasri)と一緒にあった。このタムロン氏はタイ人で教育関係の第一人者といわれるだけあって、機内にも数人の知人がいて話が尽きないようであった。

ウボルはタイで3、4番目の大都市ということで、東北地域の中心をなしている。しかしチェンマイ等と違って日本人はあまり訪れないようであった。ひなびた空港には関係者数人が出迎えてくれた。われわれの宿はパツームラト・ホテル(Patoomrat Hotel)(蓮の花の意という)で、車が空港を出ると間もなくその偉容を望むことができた。8階建の立派なホテルで、ウボルにはこのような高層建築は少なく、やや不釣り合いな感じがした。ホテルの近くにある地域の非公式教育センター(Regional Non-Formal Education Center)は従来タイ・ユネスコ・基礎教育センター(TUFEC)といわれていたものであるが、隣接する地区生涯教育センター(Provincial Life Long Education Center)と協力して今回のワークショップの会場を引受けたのであった。

われわれと前後してタイ文部省の成人教育や教育工学関係の課長はじめ数人の職員、地域センター職員が集り準備委員会が発足した。ユネスコ側からワークショップの目的、活動、日程に関する案が提出され、その審議とともにワークショップで配布する資料が準備されていった。準備委員の中にはアメリカの平和部隊3名も加

わっていたが、その内2名は文部省に勤務し、他の1名は北部地域で働いているということであった。討議は英語とタイ語で行われたが、話が混み入ってくるといつの間にかタイ語に変わっていった。文部省の職員の一人在タイ語の討論を英訳してくれたが、彼女も話中に無中になって役目を忘れ勝ちであった。学習パッケージに関し、私に課題解決過程の調整システムの話をしてほしいということで、或る日講義を行った。日頃考えていることの一端を話したつもりであったが、タムロン氏によってこの時の原稿がタイ語に訳され、“動的学習過程”と題するワークショップ資料として配布された。

われわれはタイの農村教育の実態を見聞する機会を与えられた。地域非公式教育センターに始まり、生涯教育センター、定時制の補習学校、巡回職業訓練、新聞閲覧センター (News paper Reading Center)、ラオス人難民収容施設、養蚕農家等であった。地域センターは、かなり広い敷地の中央に管理棟、食堂、図書館、視聴覚棟を配し、周辺部に宿泊施設、職員住宅を巡らせていた。このセンターに接して陸上競技場、教員養成大学、生涯教育センターが置かれて、全体が町の文教地域を成していた。われわれは地域センター内の施設を次々見て回った。管理棟の中の放送室、調査室、少し離れた場所にある図書館、印刷所等は興味深いものであった。印刷所では、職員が印刷物の背表紙をのり付けしていた。そのゆっくりした動作をみかねて、渡辺氏は能率的に貼るには何枚もの表紙を重ねてのり付けすればよいと口をはさんだが、その職員答えて曰く、早くやっしまえば仕事が無くなるからこうしていると。ACEID内での渡辺氏の能率的な仕事ぶり、助手に対するてきぱきとした指示の与え方を思い浮べてその対照的なのにあらためて驚いた。

地区生涯教育センターは、短期の職業訓練や普通教育を青少年対象に行っていた。ここもやはり広い敷地の中に、木造平屋の数棟をもち、さらに幾棟かを建築中であった。短期職業訓練

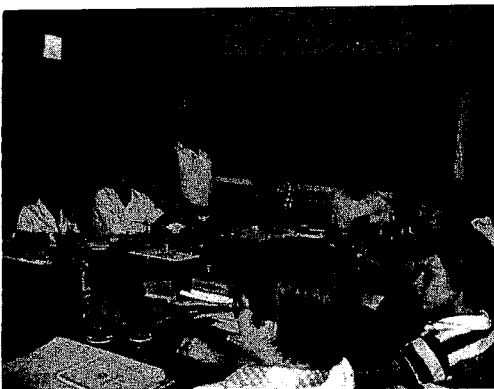
が人気を集めているようで、裁縫、美容、タイプライティング等の教室は毎日のように開講されており、各々の教室では20人程度の青年が訓練を受けていた。自動車修理実習室等いつも閉ざされていると思われる幾棟かがあった。建築は極めて簡単に柱と屋根は木造、壁はブロックを積み上げていくというもので、建築現場では木枠にセメントを詰めて土間に並べるという作業をしていた。市街地での建築現場を見ても同様であるが、鉄筋の建物でも鉄筋の量はきわめて少く、ブロックとかレンガが大部分であって、つくづく非地震国の気安さを感じた。工作室はワークショップで参加者が試作品を作成するため毎日に通った処である。電気溶接機、ドリル等やや旧式のものではあるが一応備わっていた。

ウボルから南へ約50km程離れた村デット・ウドム (Det Udom) に後期中等教育を受けるための補習教育を行う定時制の学校があった。薄暗い教室に2、30人の青年が数冊の教科書など持って集っていた。われわれが来たというので、青年校長が制服と略章をつけて学校の説明をしたが、やがて教師と生徒達が時雨の中をどこからかソファや飲物を運んで来て歓迎してくれた。平和部隊の2人が、生徒を2集団に分けて、飛び入りの英会話の勉強をやったのには驚いた。隣り合った教室では巡回職業コース (Mobile Vocational Course) が開かれミシンの指導が行われていた。このコースは短期間で移動していくとのことであった。

別の日、ウボルから北へ60km程の村バン・アムナット (Ban Amnat) の新聞閲覧センターを2箇所見て回った。政府は農村に新しい情報を提供し、その情報に接して生活向上の意欲を喚起させるというねらいでこのようなセンターを置いているとのことであった。小屋の中央に机と長椅子が置いてあり、新聞掛けには20部ほどの新聞が各々綴じてあった。国王と王妃の写真と壁の掲示物以外には何もなく、子どもとブタが入りしていた。軒続きに村の雑貨屋があり、土

間が通じていた。少し離れた所には別の新聞閲覧センターがあったが、ここは農家風で床が高く、壁は竹を編んで造られていた。新聞閲覧センターの近所にタイ・シルクを織っている農家があるというので序に立寄った。庭に金網を回らした小屋があり、その中に円形の棚を数段作って、蚕を飼っていた。丁度大きな皿の中央に柱を通し、数段の階層を造ったようなものであった。養蚕から織り物まで一軒でやっているとのことで、老母と娘が織り上った反物を見せて買えといった。バンコクなどで店先に陳列されているような柄もなく白地であったし、傷や汚れが目立ったので求める気がしなかった。

ウボルの効外にバハイ・センター (Bahai Center) というラオスからの難民キャンプがあった。広大なキャンプの回りは有刺鉄線で隔離され、入口での検問は厳しくカメラ等一切を預けて通された。キャンプの一角には軍隊が駐屯し、ジープが並んでいた。2万人以上の難民がここに収容されているというが、真暗な長屋に各々300人程が雑居し、みじめな生活をしていた。しかしこのキャンプの中でも子供達は、ボールの代りに木の枝を地面に立て、それを蹴って遊んでいた。通路に沿って小さい店が並び、日用品や中華まんじゅうの如き食料品を売っていたし、図書室や職業訓練室、教室等もあった。これらは、夏の海水浴場に並ぶ一時休憩所のような簡単なもので、殆んど竹製であった。外来者



ワークショップ準備委員会
(手前中央が渡辺氏)

向けのみやげ物売場もあり、テーブルセンターやショルダーバッグ等を婦人連中が十数台の織機で織り上げ、売っていた。値段の交渉に何分も要して、テーブルセンターと銀製という腕輪を買った。アメリカへ移住したいと言う者などいて、平和部隊には人気があった。

かような実地見学を含む準備作業を経て、8月13日からいよいよワークショップが開かれた。汽車やバスで何時間もかかって参加者は続々と地域センターに集った。彼等は農村開発指導に携わる青年達で、獣医、平和部隊員のほかは教師や地域センターの職員のようにであった。中部、南部、北部、東北部の4地域にタイは分割されるが、各々の地域から6名ずつ計24人となった。これらの参加者に準備委員会のメンバー、タイ政府関係者、地域センター職員が加わって開会式となった。開会式は地域センターのホールで行われ、地域センターの庶務課長の司会で、祭壇の礼拝、来賓挨拶と進められた。祭壇は彫刻と金箔の施された台が幾つも組み合わせられ、最上段に仏像を安置してあった。その壇の向って右に国王の写真、左に国旗を配し、この3つがタイ国民の精神構造の中核を成していることを示していた。

ワークショップは次のような目的をもち、そのための活動をすることであった。まず1) 農村の開発および問題解決のために必要な適切な工学の概念、過程、適用方法等について理解をうるため、提案や討論を行う。次に2) キット・ペン (Khid pen) と称する問題解決過程を含む適切な工学の学習パッケージ作成の技術を開発するため、例題を提起し、分析を行う。また学習パッケージの目的について討論を行い他の学習材料と学習パッケージとの比較をし、学習パッケージのフォーマットを定め、その内容を決定するため資料を分析する。3) 学習パッケージの例題となる学習材料を開発するため装置の設計、工学機械および素材の準備、諸技術の採用によって装置を作成、検査し、自己学習の可能となるように作成方法を書きあげる。

4) 農村レベルでの適切な工学を実施に移すための方法や手段を開拓し、農村の総合開発において適切な工学を統合するための方法を提案する。そして地域センター、生涯教育センター、文部省成人教育課が同等のカリキュラム開発を行うための計画を提起し、追跡計画を開発する。また、現在の機構を検討して、新しい総合的機構を提案し、ここに提出した工学上の解決を再検討するとともにそれに代るものは何か付加的なものは何かを示唆する。最後に、ワークショップの目標と成果を再検討し、ワーキング・ペーパーの検討、改訂、付加等の作業を経て、報告書を書きあげる。



ワークショップでの討議風景
(右端がタムロン氏)

これらの進行は、あらかじめ設定された日程に従い、主として文部省のボラタート氏が行った。しかし他の職員や教育工学関係団体職員がめまぐるしく進行役を交代した。討論はほとんど円型に椅子を並べて行われ、討論前の数分は地域代表等の小話し、寸劇、歌が披露された。即興のため決して上手とは言えなかったが、それはそれで座興となった。文部省の成人教育課の職員はかなり訓練されていたし、彼等を準備委員会の場合と同様、タムロン氏や渡辺氏が指導し、討議の方向づけを行った。討議を数グループに分けて行う必要のある時には、機械的に座席の片隅から1, 2, 3, 1, 2, 3……と呼称を始めた。各々の番号の者が集ってこの場合は3つのグループをつくることができた。タイ語での論議の途中で、ヌン、ソン、サム等の

番号がはじまるためわれわれの所で流れが止り、慌てて隣の者に自分の番号を尋ねるという状態が生じた。参加者達はこれを面白がった。

非公式教育や農村の適切な工学についてフィリピンやインドネシアのワークショップ参加者から報告があり、さらにワークショップに先立って実施された調査の報告等があった後、様々の講義が行われた。もちろん最初から予定されていたものもあったが、飛び入りも多かった。内容はともかく、一般に演説的で身振り手振を加えた元気のよいものばかりであった。厚生省の専門家のバイオ・ガスに関する話しは参加者に感銘を与えたようであった。バイオ・ガスは台湾等東南アジアで広く活用されているもので牛糞等に水を加えて発生させるメタンガス等を意味し、これを能率的に発生させ家庭での燃料源としようとするものである。このガスを発生させる装置の改良に政府も力を注いでいるとのことであったし、現に王室に設置されている大規模な装置のスライドが示された。彼はガス発生装置をいかなる構造にすべきか、ガス発生過程でいかなる化学反応が起るか、また原料や温度によって発生量がどのように変化するか、どのような問題点があるか等くわしく説明した。この講義の後、北部地域の参加者は、地域センターの食堂裏に未完成のまま放置されていたガス発生装置を完成させ、その後、生涯教育センター内に新しい装置を造り、学習パッケージを作成したことからみても、この話しの影響の大きさを知ることが出来た。

学習パッケージの性格の検討に際して、過去に催されたフィリピン等のワークショップ参加者から貴重な示唆があった。学習パッケージは Self-contained, Self-paced, Self-initiated の学習材料であり、学習者自身で動機づけを行い、自分で学習を進め、評価を行うことができないなければならないこと等が論じられた。これらの論議の後、4地域の参加者は各々の地域に必要と考えられる例題を選び、設計、試作、検査を行うことになった。北部地域は前述の如くバ

イオ・ガス発生装置 (bio-gas producing device) を、中部地域は太陽乾燥装置 (solar dryer) を、南部地域はポンプ (water pump) を、東北地域は除草機 (weeding machine) を作るようになった。

バイオ・ガス発生装置は下水道用の太いコンクリート筒を接続してタンクとし、中古のドラム罐の底を抜いてタンクに入れ、ガスを収集するものであった。原料やガスの量に応じてドラム罐が上下し、ビニール管を通してガスが導かれる様にした。この装置を試作する頃にはタムロン氏と渡辺氏はバンコクに帰り、代りに19日から職業教育専門家のデヤンコフ氏 (Alexander Dyankov) が参加していたが、彼はコンクリート筒とドラム罐の断面積比からガスの損失量を計算し、改良を示唆したりした。実際に原料を入れガスを発生させると、ドラム罐の中で音を立ててガスが発生し、2、3日でドラム罐に一杯になった。蠅の発生をいかに防ぐかということが残された課題であった。

太陽乾燥装置は、木または竹で百葉箱の如き枠を造り、ビニールを屋根の部分や周囲に張りめぐらしたものである。床はすのこになっており、この上にバナナ、魚、牛肉のスライスを並べ、太陽光線で乾燥させるのである。屋根の部分に間隙が設けられて蒸発を容易にし、床下には寒冷紗を張って虫の侵入を防いであった。最初の試作品は木枠を用い、釘打ちしたものであった。金鎚、釘、木材等普通の農家では準備し難いというので、二回目は竹と針金で造った。実際に様々な食品を二つの装置内に並べ、外気と室内の温度を各時刻で測定した。これら食品が適度に乾燥すると、「メコン」という商標のウイスキーなど手に入れて来て、つまみにしたり、会食パーティーを催して試食したりした。参加者の宿舎は地域センター内に建てられた寮であったが、寮の土間、玄関口が彼等の作業場であり、完成すれば中庭に持ち出すという具合で、昼寝したり、談笑しながらの作業であったがかなり能率よく進めているようであった。

除草機は、丁度昔しの手押しの田の草取り機と同様のもので、簡単な見取り図を画いて後生涯教育センター内工作室で組み立てた。草を刈る車輪の部分に曲げた釘を熔接したり、鉄片に取り替えたり、進行方向に対して或る角度をつけたり、柄の長さ、角度を変えたりした。一応出来上ると屋外へ持出し、草を取ってみた。回転すべき車が草をかんで動かなかったり、柄が外れたり、草が刈れずに残ったりした。その都度工作室で改良を加えた。私達の通訳をしてくれたブラバート氏は、以前教師をやっていたことがあるというだけあって、青年達の中に入って指示を与えたりした。何回となく試行錯誤を重ねた後遂に参加者達はこの機具の製作を断念し、それに代るものとして種播き機 (planter) を造ることにした。それは背丈程の鉄パイプの先端に種子を納める容器と、そこから一定量だけの種子を鉄パイプに送り込む装置を取付けたものであった。種子を納める容器はポリ製の広口ビンの底を抜いたものであり、種子を送る装置は2、3厘の厚さの木片に適当な太さの穴をあけたもので、種子容器と鉄パイプとは共に固定されているが両者の間で木片が滑るようにされていた。指で木片を引かないとき、木の穴は丁度ポリ容器の下に来ているが、指で手前に引くと穴が鉄パイプの上に移動する。木片はばねでたえずポリ容器の下に穴が来るようになっているので、一定量の種子が木片の穴に落ち、指を動かす度にパイプに落ちるのである。農民は鉄パイプを杖の如く使い、土中に突き立てて歩けば、種子が播けるという。これは農村にとって便利なもののようであったが、金属の溶接、切断等一般には極めて困難であると思われた。

ポンプは、井戸水を自動的に汲み上げ灌漑に役立てようとするものであった。水面からパイプを立て地上部でそれをドラム罐上部に接続しドラム罐の下部には水道蛇口を取付けるというものであった。最初ドラム罐の中に大量の水を注入しておくと、罐下の蛇口から水を出すに伴いドラム罐内の気圧が低下し、井戸水を吸い上

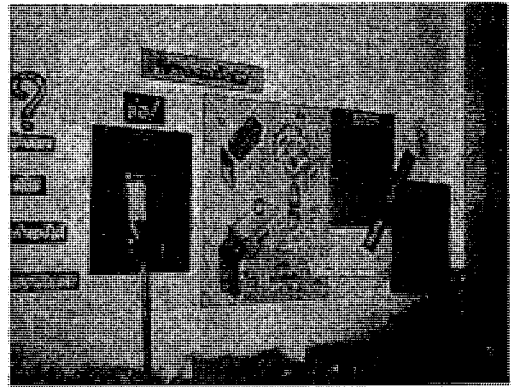
げ補給されるという想定で製作されたものであった。しかし罐内の水が流出するばかりで一向に井戸水を汲み上げてはくれなかった。罐内の水量を変化させたり、パイプの太さを調節したりはしたが事情は好転しなかった。元来いかなるエネルギーをも加えずして地下の水を汲み上げるという永久機械を目ざすもので、無理だと言っていたのだが、参加者達は可能性を信じていた。もしこの装置が完成すれば、大規模なタンクにより海水を山頂まで汲み上げる。山頂から海水を流すことに依って大量の電力を得ることができる等と話して、計画を変更させた。参加者達は結局手押しポンプを作成することにした。手押しポンプは難なく出来上ったが、この場合も農村において作成するには困難が伴うようであった。



南部地域参加者による
ポンプ作成風景

以上4地域の参加者がそれぞれ、機器の製作を行い、農村での普及を期することの出来る段階で、各々学習パッケージを作成した。これらは印刷し、全体会で検討、反省を加えた後、地域センターの一角に要約して展示・紹介した。

各々の機器がいかに必要か、いかなる効果が期待できるかを漫画風に解説したりして、農民を動機づけることが可能と思われた。やがて4地域のセンター長または専門家が集まって来て、展示および学習パッケージを検討し、各々の改良すべき点、農村社会へ普及する方法等に



学習パッケージの展示場
(種播き機・左手前に立つのが実物)

ついて最終的討議を行った。参加者の中一名の脱落者もなく、成果を挙げたことに対する賞讃とともに、企画がかなり盛り沢山でゆとりの無いこと、種々のプロジェクトが乗り入れること多く、ワークショップを複雑化したこと等卒直な意見が述べられた。

私はワークショップに最初から最後まで参加することが出来た。この間の経緯をふり返って種々の感想をもった。そのいくつかを述べておこう。

ともかく初期の目的を達成してワークショップを終了することの出来たのは、タイ政府とユネスコをはじめ地域センター、生涯教育センターの協力と参加者の熱意の賜であった。当然のことであるが、とくにユネスコの果たした役割は大きく、タムロン氏は、議事の進行に関するアドバイスから討議内容の方向づけに至る種々のコメントを与えた。

彼は食堂でのタイ料理、中華料理の注文からサムローに対する料金の交渉までやってくれ、参加者の融和を図ってくれた。頻繁に参加者と飲食を共にしたので、彼と渡辺氏がバンコクに帰る頃には、すっかり協力態勢が出来上っていた。ディアンコフ氏はブルガリア出身でバンコクへ来て日も浅く笑みを浮べて参加者に接すること少なく、超然としていた。ただ彼はタイ料理に常々使われるとうがらしをチラシずしのようにして食し、参加者を喜ばせた。

タイ政府、地域センター、生涯教育センター

の相互協力がなければ、ワークショップの成果は期し難いものであった。タイは1978年5月から学制改革で7-5制から、6-3制に切り替えた。教育課程も改められ知識中心の画一なものから、地域の自然と社会への適応を重視し、学校も地域のセンターとし、地域住民と学校の交流を図り、生活経験を通して問題解決を行い、思考力を高め、作業によって実際の技能を培う方向へと変革した直後のことであった。このような学校教育の変革は、当然成人教育との有機的連携が重要となるわけで、ワークショップもこの意味での期待が込められていたと思われる。文部省側がキット・ペンと称する問題解決的思考方法を重視し、このワークショップの機会にこれを普及せんとしたというのも必然性があった。しかしながら、この考えをワークショップの主要なねらいとなっている学習パッケージといかに調整させるかという点にかなりの時間を費す結果となった。キット・ペンは問題解決のための思考方法であり、学習パッケージは、学習内容に即した学習材料である。そこで結局私達は推奨すべきと考えられる思考方法、キット・ペンに関しても学習パッケージが必要であると提案し、キット・ペンに関する学習パッケージが作成されたのである。

ただ、キット・ペンと学習パッケージの位置づけに関する度重なる論議の過程で、タイの中央と地方の関係、すなわちきわめて地方分権的色彩が強いことを知ることが出来た。文部省の課長はじめ5、6名が何度となくバンコクから夜行でバスで約9時間の旅をして来て、キット・ペンを説得し、1、2日で引上げていった。ワークショップのほとんど終了する頃まで、討議の流れに拘らず議論をむし返したので、初期にはユネスコ側と論争していたのが、次第に参加者の反論を受けることとなった。通訳のブラパート氏も役目を忘れて討論に加わるという状況であった。討議の内容はともかく両者の執拗さには全く感心させられた。

前述した通りワークショップの過程を通じて、実に多くの飛び入りの講義等があった。或る短期間様々の人達が討議が参加しいつの間にか消えていった。或る日、WHOの青年男女が数頁のレポートを作り、インドにおける体験談を話したことがあった。ユダヤ系と思われる髭の青年がすたすたと前に出て話し出すと、色白のトンボ目鏡の女性も椅子を前へ持出し、草煙をくゆらせながら、時折り合づちをうつというスピーチは、ワークショップの中でどう位置づけてよいか理解に苦しんだ。幾つかの人種からなる国が国内外の紛争を処理し、これまで独立国を維持しえたのも、この清濁合わせ呑むという鷹揚さが必要であったのであろう。たしかに過去にしばしば諸外国の脅威に曝されて来たり、現在も変りがない。ベトナム戦争当時この東北地区から米軍が飛び立った由で、今は廃虚となったバーや食堂が残っていたし、現在も存続するアタミとかロングビーチ等の名称のマッサージ場もその頃の名残りであろうと思われた。ラオスとの国境でゲリラの奇襲が生じるとわれわれの宿泊しているホテルには、軍の要人が宿泊し、ジープや兵員を乗せたトラックが前庭に並び、ヘリコプターが上空を旋回した。

ワークショップを通じて私は実に多くのタイの人達に接し、互いに友好を深めることができたのは大変嬉しいことであった。地域センター職員で10年程前にわが国を訪れたことのある青年は、図書館に勤務する夫人共々世話をやいてくれた。地域センター内の宿舎に招待され、日本での写真やみやげものとして買ったという風呂敷が大切に保管されている様子を見せられ、嬉しかった。参加者もよくホテルへ電話をかけて来て、今からパーティをやるとか、めずらしいところを案内するとか言って私達を引き出した。多分に経済的理由から引き出されたものと思うが、楽しい時間をもち、様々の経験を共に出来たことは何ものにも代え難く、哀調を帯びた流れる如きタイの流行歌とともに忘れることの出来ない思い出となった。